

神の御業

比良竜虎
東京、日本

1997年、妻の佳代子と私は、プラシャーンティ・ニラヤムで他の人々と共にスワミのインタビューに呼ばれるという幸運を得ました。皆が座ると、インタビュー・ルームの中は、言葉では言い表せないほどの至高の平安で満たされました。深い静寂のなか、皆がスワミを見ていました。すると最も慈悲深い神は、虚空の中で優雅に右手を回して、何もないところからアクリル・カバーに包まれたとても美しい金のペンダントを物質化なさいました。スワミはそれを皆に見せるために回してくださいました。片面に仏陀の像が、反対側に仏教の碑文が刻まれていました。そのペンダントは光沢があり、強力なエネルギーを放っていました。ペンダントがババ様の手元に戻ると、ババ様は質問なさいました。

「**仏教徒は誰ですか？**」しばらくの間、誰も返事をしませんでした。私たちは皆、ただひたむきにサイだけを信じていたので、両親や先祖から受け継いだ家族の信仰のことをすっかり忘れてしまっていたのでした。

それから、バガヴァン・ババは私の妻、佳代子をお呼びになり、この最も貴重な神の贈り物である仏陀のペンダントを妻に授けてくださいました。それは、彼女に感謝の涙と、厳格な仏教徒の家庭に生まれ育ちながら、彼女が仏教をおざなりにしてきたという後悔の念をもたらしました。このことがきっかけになり、妻は仏教徒であるという思いを取り戻し、仏教について新たに勉強し直し、その教義を実践し始めました。

私たち夫婦は、テルグの新年である吉兆のウガーディの日に女の子、「優里」を授かるという幸運に恵まれていました。1999年、ホワイトフィールドのブリンダーヴァン・キャンパスで仏陀ブルーニマー祭〔花祭り〕を祝うため、インドを訪れました。日本がその祭を共同で主催することになったため、私たちは始終、娘を背中におぶってセレモニーの進行やシンポジウム、食事、文化プログラムを催す準備のセヴァを行わなければなりません。神の恩寵により、プログラムが無事に成功裏に終わった後、ババ様は寛大にも仏教徒のグループのために、カッリヤーナ・マンタップ・ホールでグループ・ダルシヤンを授けてくださいました。ババ様は大変慈悲深く、妻の佳代子に尋ねられました。

「**比良はどこにいますか？**」妻は応えました。「スワミ、比良はとても思い遣りがあり、このスワミのダルシヤンの機会を私が利用すべきだと考えて、ホールの外で娘の子守りをしてくれているのです」。スワミは妻におっしゃいました。「**子供は母親と一緒にいるべきです**」。そこで、妻はダルシヤン・ホールを出て娘を受け取り、赤ん坊が泣いてもダルシヤンの邪魔にならないよう廊下の突き当たりのドアの、遠い場所に立っていました。ダルシヤン

が終わってすぐ、ホールを去ろうとしたその時、ババ様は優しく手を回し、両面に仏陀の像が付いた金色の鎖のペンダントを虚空から物質化して、それを私たちの1歳になる娘の首に付けてくださいました。神の御業がなされ、割れるような拍手がホール中に響き渡り、私たちは至福の涙を流しました。私たちは将来を思い、娘がサイの信者になってくれればと切に願っていたのですが、スワミは再びサイと仏陀はひとつであることを示し、私たちを鼓舞してくださいました。この経験から、私たちはサイ仏陀について学ぶことになったのです。

比良竜虎 著『The Study of Sai Buddha』より



Divine Manifestations by Bhagwan Sri Sathya Sai Baba



A : Lord Buddha's golden pendant - front
B : Lord Buddha's golden pendant inscriptions - back



C : Lord Buddha's golden chain pendant - front
D : Lord Buddha's golden chain pendant - back